

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成26年12月1日発行 通巻26号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222
http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html
e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

JICA草の根技術協力事業の 新規採択

JICA草の根技術協力事業「カンボジアにおける農作物・加工品の安全性向上プロジェクト」が採択となり、2014年9月2日に事業開始を迎えました。同事業の採択は、2010年12月より3年間カンボジアにて実施した「伝統産業復興による農産物加工産業振興プロジェクト」に続いて2件目となります。

近年、急速な経済成長を遂げているカンボジアでは、都市部における農産物・加工品の安全性確保と、農村部における農業所得の向上が2大ニーズです。未包装の加工品や農薬まみれの野菜が主流の中、食品の安全性を高めるためには、食の安全の重要性について消費者に周知するとともに、安全な農産物・加工品が付加価値化されるような市場を築いていくことが急務です。本事業では、2008年より文部科学省科学研究費補助金、文部科学省国際協力イニシアティブ事業、JICA草の根技術協力事業等によって見出ししてきた成果を活用することで、カンボジア王立農業大学(RUA)

プロジェクトの概要

プロジェクト名	カンボジアにおける農産物・加工品の安全性向上プロジェクト (2014年9月から5年間)
目標	プロジェクト対象地域で、安全性を重視した農産物・加工品が継続的に製造・販売される
期待される成果 (対象州・市)	成果1. 安全な米蒸留酒の製造方法を身につけた中核農家が育成される(タケオ) 成果2. 米蒸留酒の主要生産地においてメタノールの添加による危険性が周知される(ブンベン、タケオ、プレイベン、スパイリエン、プルサット、シェムリアップ) 成果3. 日本の安全基準で栽培された野菜が都市の市場において高価格販売される(コンボンズプー、タケオ) 成果4. 王立農業大学に、安全な農産物・加工品の製造と販売に関する知と技が蓄積される(ブンベン)
受益者層	成果1. タケオ州2郡の12コミュニティの酒造農家約353世帯 成果2. ブンベン市内の酒類販売店100軒、酒類消費者2,000人、主要な米蒸留酒生産地5州の酒類販売店及び酒造農家100世帯、米蒸留酒の消費者1,000世帯 成果3. コンボンズプー州、タケオ州の野菜栽培農家200世帯 成果4. ブンベン市内のスーパーマーケット利用者(人数特定不可) 王立農業大学の学生(2,500~5,000人)

とともに「米蒸留酒」と「野菜」の安全性向上に取り組みます。

「米蒸留酒」の安全性向上に向けた取り組みでは、これまで手がけてきた高品質な米蒸留酒を製造するための技法の普及活動において、安全性の側面から衛生管理や異物混入を防ぐために徹底した指導を行います。米蒸留酒は、日本の梅酒作りに使われるようなガラス瓶に入れて店頭で並べられ、柄杓ですくって量り売りされています。このため常に異物混入への不安が伴い、実際に飲酒による死亡事故が毎年発生しています。事故の多くは、メタノール混入が原因であると考えられており、死亡に至らなくても失明の危険性があります。本事業では上述した研修に加えて、過去に米蒸留酒による死亡事故が多発している5州を対象とし、消費者や販売者に対する正しい知識の提供を目指したキャンペーンを展開し、メタノール混入酒による事故の撲滅に貢献する計画です。

また本事業では、新たに野菜の安全性向上に向けた取り組みに着手しています。カンボジアは、米の自給は達成していますが、国内消費される野菜の殆どを近隣諸国からの輸入に依存しています。現在カンボジアでは、国産・輸入ともに農産物の残留農薬検査が実施されておらず、また適切に実施できる機関もありません。このため消費者は、常に残留農薬の不安に駆られています。本事業では、このようなカンボジアの状況を踏まえて、ハードルの高い無農薬や有機栽培ではなく、日本の農薬使用基準を「日本の安全基準」として用い、農家に農薬の適切な利用方法を指導すると同時に、付加価値販売を実践します。

2014年10月10日に、カウンターパート機関であるカンボジア王立農業大学(RUA)においてキックオフミーティングを開催し、JICAカンボジア事務所の井崎所長や担当職員の方々にもご出席いただきました。およそ4年前、1件目の草の根事業のキックオフミーティングでは、会議の準備や発表を殆ど全て日本側が行ったのに対して、2件目となる今回は、ほぼ全てRUA側による準備・発表で取り仕切られ、前プロジェクトによる人材育成の成果が感じられる機会になりました。本事業においても前回と同様、全ての活動をRUAとともに実施することで、同大学の教員・学生への研究やフィールドベースでの教育機会を提供し、実践的な教育・研究の発展に寄与できるように取り組んでいきたいと思っております。(伊藤香純)



キックオフミーティングの様子